

## 活動記録

ひょうご歴史研究室は、平成二七年（二〇一五）四月、県民の郷土に対する愛着を深め、「ふるさと意識」に根ざしたひょうご文化の発展・継承をめざし、また県内各地の歴史の調査・研究を目的にして、兵庫県立歴史博物館内に開設された（設置要綱は110頁に掲載）。

研究室の構成メンバーは、博物館長が室長を、次長が副室長を兼務し、そのほか館内外の博物館・資料館の学芸員や職員、市町の文化財担当者、大学研究者、民間団体研究者などに、参与・研究員などとして協力を仰いでいる。

本年度から、新しく三名の研究者（中井淳史・兵庫県立大学地域資源マネジメント研究科教授、岩城卓二・京都大学人文科学研究所教授、吉原大志・兵庫県立歴史博物館学芸員）が加わった。

これらの全体を統括するのは、教育委員会事務局文化財課の山下史朗文化財課長で、そのもと本年度は、三名の文化財課職員が、各班の補佐役を担当した（中村弘主幹、小川弦太主査、永恵裕和技術職員）。

また非常勤職員の研究コーディネーター（坂江渉）・歴史研究推進員（大村拓生）・事務スタッフ（長澤喜史県政推進事務員）の各一名を配置し、研究室は現在、総勢三二名で成り立っている（詳細は111頁の「室構成メンバー一覧」を参照）。

開設初年度、研究の基本方針を討議するコア会議、全体会会議の開催を経て、室の当面の研究テーマを、

- ①『播磨国風土記』、
- ②赤松氏と山城、
- ③たたら製鉄、

の三つにするという方針が立てられた。その遂行のため、三つの研究班が編成された。

平成二七年度は、編纂一三〇〇年

記念を迎えた『播磨国風土記』研究、二八年度は、赤松氏と山城研究、二九年度は、たたら製鉄研究に集中的に取り組んだ。開設四年目に入った本年度は、とくに重点的な研究テーマを立てなかった。

本年度は全体として、館内外における横断的な研究を前進させた点、大きな特徴である。一つは、「刀剣銘」を基軸にした赤松氏と山城研究班とたたら製鉄研究班の合同調査研究。もう一つが、淡路島日本遺産委員会と島根県古代文化センターとの連携調査である。これにもとづく研究成果があらわれた年となった。

以下、三つの班の研究活動と研究成果について紹介する。なお各班の研究会和館外の調査活動については、108・109頁の一覧表を参照のこと（本誌第三号に未掲載の昨年度の分も含む）。また本年度は、全体会を一回、コア会議を二回開催した。以下、敬称を略した箇所がある。

## 一、『播磨国風土記』研究班

### (1) 体制と研究方針

本年度は、文化財課職員の小川弦太主査と、藤田淳研究員がたたら製鉄研究班に移動し、代わって文化財課職員の中村弘主幹が補佐役メンバーに加わり、合わせて八名の構成となった。

一回目の研究会で、研究方針を昨年度と同様、「『播磨国風土記』調査研究を持続させるとともに、関係する自治体関係者との信頼関係を確立した上で、広く県内各地の古代史研究にも着手する」とすることが確認された。

その後、『播磨国風土記』研究（以下、風土記と略する場合がある）と、淡路地域史研究を二つの柱に立て、平成三十一年一月末段階で、館外調査を一回（昨年度は一六回）、研究会を三回（昨年度と同数）開催した。

### (2) 研究成果

風土記研究については、神話・伝承や、古代寺院に関わるたつの市・加西市・神河町などの現地調査をおこない、各地の歴史的な地形環境分析をすすめた。また平成二八年度以来、本格的に取り組んでいる風土記の写本調査を実施した（垣内章客員研究員が担当）。

一方、淡路地域史研究は、昨年度から、淡路島日本遺産委員会と連携して、本格的に取り組み出したテーマである。本年度からは、新たに島根県古代文化センターがこれに加わり、合同調査研究体制が充実した。これらにより、新たな知見を得ることが出来た。

淡路島日本遺産委員会と島根県古代文化センターとの連携は、来年度も継続することが確認されている。また研究体制をより強化させるため、来年度から、淡路市教育委員会の伊藤宏幸文化財活用等担当部長が

新メンバーに加わる予定になっている。

これらを踏まえ、本研究班では、つぎのような成果を公表した（昨年度分も含む）。

### (3) 研究成果の公表

#### ① ひょうご歴史研究室 in 淡路島（昨年度分）

平成三〇年二月四日（土）、淡路市立サンシャインホールで、ひょうご歴史研究室 in 淡路島・淡路島日本遺産海人の調査研究事業「淡路島古代史の魅力を探る ～海人と国生み神話～」シンポジウムを開催した。講師と講演テーマは以下のとおり。

#### □ 古市晃（客員研究員）

「古代の淡路島と海人」

#### □ 伊藤宏幸（淡路市教育委員会文化財活用等担当部長）

「考古学からみた淡路島の海人」

#### □ 坂江渉（研究コーディネーター）

「国生み神話と古代の海人」

休憩の後、垣内章（客員研究員）と定松佳重（南あわじ市教育委員会社会教育課課長補佐）を司会として、会場から寄せられた質問にもとづき、約一時間のパネルディスカッションをおこなった。

討議では、古代淡路島の「海人」の実態をどうみるか、他地域との交流の実相、海人の「干潟の祭り」のあり方などをめぐり、活発な議論が交わされた。

参加者からは、「海人のイメージが変わった。漁撈だけをしている人だと思っていた」「当時の淡路島が先進的な場所で、日本各地に影響を与えていた歴史がよく分かった」「今後は、古代の淡路島の歴史にヤマト政権がどのように関わったかについてのシンポジウム開催を要望する」などの感想、意見が寄せられた。

参加者は二五〇名であった。

## ②本誌での論文執筆

古市晃客員研究員が淡路地域史研

究の成果を、垣内章客員研究員と中村弘主幹が、風土記の調査成果を執筆した。また竹内通弘洲本市長に、淡路島日本遺産に関する特別寄稿を依頼した。

## ③ひょうご歴史研究室in淡路島II

淡路島日本遺産委員会と島根県古代文化センターとの合同調査研究の成果を踏まえて、平成三十一年二月二日（土）、南あわじ市福良地区公民館で、市民向けのシンポジウム「淡路島の海人と地域間交流 ～5世紀の倭王権・播磨・出雲～」を開催する予定である（研究室と淡路島日本遺産委員会が主催、島根県教育委員会が共催）。

池淵俊一（島根県教育庁文化財課調整監）が、「出雲の淤宇宿禰・野見宿禰伝承と倭王権」、的崎薫（南あわじ市教育委員会埋蔵文化財調査事務所課長補佐）が、「南あわじ市の木戸原遺跡・雨流遺跡の調査成果とその意義」と題する講演をおこなう。

またその後、古市晃客員研究員と伊藤宏幸淡路市教育委員会文化財活用等担当部長をパネリストとして、約一時間程度の討議をする予定である。

## 二、赤松氏と山城研究班

### (1)体制と研究方針

本年度から、新たに中井淳史・兵庫県立大学地域資源マネジメント研究所教授を客員研究員として迎え、構成メンバーは一〇名となった。

一昨年度決定した、「三ヶ年を目的にして、上郡町が実施する「赤松館」の埋文調査と連携しつつ、それと並行して千種川流域を中心とする基本的な文献資料のデータ収集・整理にあたり、その調査・分析をすすめる」という方針のもと、調査研究に臨んだ。また新たに、千種鉄にもとづく日本刀の「刀剣銘文」をめぐる研究にも着手した。大村拓生歴史研究推

進員を主たる担当者として、たたら製鉄研究班と連携しながら、資料調査をおこなった。

平成三十一年一月末段階で、単独の館外資料調査を四回、たたら製鉄班との合同資料調査等を七回、紀要原稿に向けての小研究会を一回、研究会を二回おこなった(第三回目の研究会を、三月九日におこなう予定)。

## (2)研究成果

本年度の最大の成果は、たたら製鉄班との合同調査により、千種鉄を原料とする刀剣の制作と、前近代播磨の鉄鍋・刃物の生産と流通について、かなりの実態説明を出来た点である。その成果を、大村歴史研究推進員が本誌に執筆するとともに、年度末の三月三日の研究発表フォーラムにおいて講演する予定になっている。

また一昨年度来、研究室と連携して上郡町がすすめている「赤松居館

跡」の試掘調査は、本年度で最終年を迎えた。発掘された三時期の遺構面、礎石、土師器などの遺物の評価について、班内での議論を経た上、その成果を島田拓共同研究員が本誌の論考として公表した。

再来年度は、上郡町において「発掘調査成果報告書」が刊行される予定だが、その内容の取りまとめについて、本研究班のメンバーが協力することが決められた。来年度の方針は、最終的に三月九日(土)、当館で開催される第三回研究会で正式決定される。

これらを踏まえ、本研究班では、つぎのような成果発表をおこなった。

### (3) 研究成果の公表

#### ①本誌での論文執筆

本誌において、島田拓共同研究員が「赤松居館跡の発掘調査成果について」、大村拓生歴史研究推進員が「千種鉄の流通と刀剣」と題する論文

を発表した。また「歴史遺産活用」コーナーで、藤木透共同研究員が「利神城の史跡指定とその活用」を執筆した。

#### ②研究成果発表フォーラム

本年度末の平成三十一年三月三日(日)、姫路文学館講堂において、平成三〇年度の研究成果発表フォーラムを開催する予定である。テーマは、「ひょうごの鉄生産と流通」(弥生時代から近代まで)とする。

倭国内で自前の製鉄技術がなかった弥生時代から、新日鉄広畑工場に象徴される近代までの、兵庫県内の鉄の生産と流通について、総合的な議論をすることになっている。講師と講演テーマは以下のとおり。

□伊藤宏幸(淡路市教育委員会文化財活用等担当部長)

「製鉄前夜の鉄器生産」(兵庫県下の鍛冶遺構を中心に)

□大村拓生(歴史研究推進員)

「千草鉄の流通と刀剣」

□土佐雅彦（共同研究員）

「たたら製鉄から近代製鉄へ」

これらの講演は、淡路島日本遺産委員会との連携、および赤松氏と山城研究班とたたら製鉄研究班による合同調査研究の成果が活かされている。

### 三、たたら製鉄研究班

#### (1)体制と研究方針

本年度は、岩城卓二・京都大学人文科学研究所教授を客員研究員として、吉原大志・当館学芸員を研究員として、新たなメンバーに迎えた。また『播磨国風土記』研究班から、藤田淳研究員と小川弦太主査が本研究班に移動し、総勢一〇名の構成となった。

一回目の研究会で、昨年度と同様、研究方針を、「宍粟市と共同して、考古部門と文献調査部門の基礎的研究をすすめる」とすることが確認され

た。

平成三一年一月末段階で、単独の館外資料調査を一回、赤松氏と山城研究班との合同資料調査を七回、研究会を三回、さらに史料集の刊行に向けての小研究会を二回おこなった（八月三二日と一二月一二日）。

#### (2)研究成果

本年度の研究成果の特徴は二つある。

一つは、赤松氏と山城研究班と連携して、千種鉄を原料とする「刀剣銘文」の調査研究と、近世から近代に至る播磨の製鉄研究がすすみ、新たな知見を得たことである。

もう一つは、メンバーの発案により、当館所蔵の二つの史料群、『宝暦六年鉄山一件』と『播磨宍粟郡鉄山請負御用留』の翻刻作業が始められ、近世播磨のたたら製鉄の経営実態の究明が前進した点である。

現在のところ、翻刻に向けて、二

回の小研究会が開かれ、その成果は、来年度末、一冊の史料集（本誌別冊）として刊行される予定になった。担当する研究員は、大槻守・伏谷聡・笠井今日子・村上泰樹の四名である。

考古学の分野では、宍粟市を中心とする古代〜近世の遺構群の掘り起こしをおこない（分布調査など）、新しい情報が蓄積された。夏の台風被害により、調査は途中から頓挫せざるを得なくなったが、分布調査は来年度以降も継続される予定である。

一方、昨年度から本格的に始まった、島根県古代文化センターとの連携・交流は本年度も持続された。八月二四日〜二五日、島根県松江市でおこなわれた同センター主催の「客員研究会」に藪田貫館長（兼室長）が参加し、学術的な意見交換をおこなった。島根県古代文化センターとの連携・交流は、来年度も継続することが確認されている。

これらを踏まえ、本研究班では、

つぎのような成果発表をおこなった  
(昨年度分を含む)。

### (3)研究成果の公表

#### ①本誌での論文執筆

本誌において、土佐雅彦共同研究員が、「たたら製鉄から近代製鉄へ」と題する論文を発表した。また「歴史遺産活用」コーナーで、藤田淳研究員が、「千種鉄によるたたら製鉄復元の取り組み」を執筆した。

#### ②研究成果発表フォーラム(昨年度分)

平成三〇年三月四日(日)、館内ホールにて、平成二九年度・研究成果発表フォーラム、「播磨のたたら製鉄研究の新展開」を開催した(宍粟市と宍粟市教育委員会の後援)。

岩波映画製作所の短編映画「和銅風土記」(約三〇分)の上映の後、つぎのような市民向けの講演をおこなった。休憩の後、パネルディスカッションを実施した。

□笠井今日子(共同研究員)

「古文書からみた近世播磨のたたら製鉄」

□田路正幸(共同研究員)

「考古学からみた宍粟の製鉄遺跡」  
大槻守客員研究員と村上泰樹共同研究員を司会としておこなわれたパネルディスカッションは、幕領における播磨のたたら製鉄の特色、鉄の流通ルートの問題などをめぐり、約一時間かけて、熱心に繰り広げられた。

回収したアンケート用紙には、「播磨の奥地にも、「たたら」という自慢できる歴史遺産があることに気づいた」「播磨はものづくりで発達してきた地域。それを支える素材(鉄)の供給が、奈良時代から始まったという点が興味深かった」「岩波の記録映画をみて、たたら製鉄の工程がよく分かった。話だけでは抜け落ちる点がフォローされていた」などの感想が寄せられた。

参加者は二五〇名であった。

#### ③ひょうご歴史文化フォーラム

ひょうご歴史フォーラムは、毎年開催される博物館主催の行事である。本年度は、平成三〇年一月四日(日)、宍粟市の山崎文化会館で、「播磨のたたら製鉄研究の新展開」(宍粟のたたら製鉄を中心に)というテーマでおこなわれた(研究室と宍粟市・宍粟市教育委員会が主催団体に加わった)。講師と講演テーマは以下のとおり。

□土佐雅彦(共同研究員)

「解説・鉄のお話」(たたら製鉄とはなにか)

□笠井今日子(共同研究員)

「古文書からみた近世宍粟のたたら製鉄」

□田路正幸(共同研究員)

「新たに発見された宍粟の製鉄遺構」

休憩の後、岩城卓二客員研究員と村上泰樹共同研究員を司会として、

会場からの質問用紙も参照しつつ、約三〇分のパネルディスカッションをおこなった。

討論では、出雲・石見と比較した、播磨のたたら製鉄の「請負」と「経営」実態の特質や、鉄の流通をめぐる「たたら遺産」(船着き場・墓石・石造物・標石など)の活用の方向性などについて、活発な議論が交わされた。

参加者からは、「たたらと言えば、出雲としか知らなかった。江戸時代の穴粟で、これほど多くのたたら製鉄をおこなっていた事実には驚いた」「今日のフォーラムに参加して、現在の山崎が、かつてどのような町であったか、よく分かった」などの感想が寄せられた。

参加者は一七〇名であった。

#### ④研究成果発表フォーラム

本年度末の平成三十一年三月三日(日)、姫路文学館講堂において、平成三十年度の研究成果発表フォーラ

ムを開催する予定である。

内容は前述のとおりである。本研究会からは、土佐雅彦共同研究員が、「たたら製鉄から近代製鉄へ」と題する講演をおこなう。

#### 四、その他

研究室では、平成二十七年の秋、情報発信ツールの一つとして、ホームページを開設した。催し物の案内のほか、三つの研究班の調査活動や研究成果を取り上げ、本年度も情報更新につとめた。

(以上、文責は坂江渉)

**平成29年度（承前）～平成30年度  
ひょうご歴史研究室研究会一覧（敬称略）**

**コア会議と全体会**

	日付	場所	内容	人数	備考
①	4／21(土)	館内	平成30年度第1回コア会議	15	事業企画の具体化
②	7／15(日)	館内	平成30年度全体会	28	事業企画の具体化
③	11／17(土)	館内	平成30年度第2回コア会議	11	来年度方針の立案

**『播磨国風土記』研究班**

	日付	場所	報告等	人数	備考
	1／13(土)	洲本市	・武田信一（淡路地方史研究会会長）「国生み神話と淡路島の海人」 ・古市晃「近世淡路の地誌にみる古代認識—『淡路五草』を素材にして」	18	淡路島日本遺産委員会との合同研究会
①	6／16(土)	館内	・古市晃「仲野安雄家関連文書調査について」	14	
②	9／2(日)	南あわじ市	・的崎薫「木戸原遺跡・雨流遺跡」 ・池淵俊一「淤宇宿祢・野見宿祢伝承と倭王権」	16	淡路島日本遺産委員会と島根県古代文化センターとの合同研究会
③	12／15(土)	館内	・古市晃「仲野安雄の古代認識」	15	2／2シンポジウムの打合せも実施

**赤松氏と山城研究班**

	日付	場所	報告等	人数	備考
	3／11(日)	館内	・田村正孝「播磨国一宮伊和社・赤松五社宮と守護赤松氏」	8	置塩城現地調査も実施
①	6／3(日)	上郡町	・中井淳史「赤松氏関連遺跡の土師器皿」 ・大村拓生「刀剣研究と赤松氏」	12	
②	9／20(木)	館内	・山上雅弘「淡路の港津と権力」 ・大村拓生「千草鉄の流通と刀剣」 ・島田拓「赤松居館跡発掘調査の現況と今後の方向性」	13	

(※) 赤松氏と山城研究班では、『紀要』原稿執筆に向けての小研究会が12／21に開催された。

(※) 本年度3回目の研究会は、平成31年3月9日（土）に開催予定。

**たたら製鉄研究班**

	日付	場所	報告等	人数	備考
	3／4(日)	館内	・次年度の研究方針と島根県との連携をめぐる討議等	13	
①	6／17(日)	館内	・笠井今日子「鉄山御請負御用留」について ・岩城卓二「コメント・鉄山御請負御用留」 ・大村拓生「刀剣研究と千草鉄について」	16	
②	10／7(日)	館内	・「宝暦六年鉄山一件」「播州宍粟郡鉄山請負御用留」の翻刻史料集の刊行について	14	
③	12／15(土)	館内	・伊藤宏幸「製鉄前夜の鉄器生産 ～兵庫県下の鍛冶遺構を中心に～」 ・大村拓生「千草鉄の流通と刀剣」 ・土佐雅彦「たたら製鉄から近代製鉄へ」	15	淡路島日本遺産委員会から招聘

(※) たたら製鉄研究班では、翻刻史料集の刊行に向けての小研究会が8／31と12／12に開催された。



## 平成29年度（承前）～平成30年度 ひょうご歴史研究室現地調査一覧

### 『播磨国風土記』研究班

	日付	用務	行き先	人数	備考
	2/14(水)	現地調査	舟木遺跡（淡路市）等	2	遺跡・史跡等
①	5/9(水)	資料調査	洲本市立淡路文化史料館	2	史料調査と撮影
②	5/13(日)	現地調査	龍野歴史文化資料館、夜比良神社等	1	資料調査・神社など
③	7/13(金)	現地調査	加西市教育委員会、吸谷廃寺	1	資料調査と現地調査
④	8/1(水)	資料調査	洲本市立淡路文化史料館	1	史料調査と撮影
⑤	8/9(水)	資料調査	洲本市立淡路文化史料館	1	史料調査と撮影
⑥	9/1(土)	現地調査	南あわじ市埋文調査事務所、木戸原遺跡等	3	資料調査と現地調査
⑦	9/29(土)	現地調査	新部大寺廃寺、河合廃寺、小野市立好古館等	1	資料調査と現地調査
⑧	10/3(水)	現地調査	神河町教育委員会、堂屋敷廃寺、法楽寺等	1	資料調査と現地調査
⑨	10/6(土)	資料調査	兵庫県立考古博物館	3	雨流遺跡資料の撮影
⑩	11/20(火)	資料調査	洲本市立淡路文化史料館	2	史料調査と撮影
⑪	12/11(火)	資料調査	洲本市立淡路文化史料館	2	史料調査と撮影

### 赤松氏と山城研究班

	日付	用務	行き先	人数	備考
	2/15(水)	現地調査	禪宗寺院（多可町）など	1	寺院等の現地調査
①	5/3(水)	現地調査	竜泉寺（加古川市）福勝寺（播磨町）等	1	石造物と豪族居館調査
②	8/30(水)	現地調査	赤松居館跡（上郡町）	9	発掘調査現場の熟覧
③	10/17(水)	現地調査	赤松居館跡（上郡町）	6	発掘調査現場の熟覧
④	11/1(水)	現地調査	京都国立博物館、建仁寺開山堂等	1	史跡と展示史料調査

### たたら製鉄研究班

	日付	用務	行き先	人数	備考
①	7/20(金)	資料調査	旧千草屋・天児屋鉄山遺跡等（宍粟市）	4	資料撮影と現地調査

### たたら製鉄研究班と赤松氏と山城研究班の合同調査

	日付	用務	行き先	人数	備考
①	7/5(水)	資料調査	国立国会図書館関西館	1	文献閲覧
②	8/10(金)	資料調査	岡山県立図書館	1	文献閲覧
③	8/16(水)	資料調査	国立国会図書館関西館	1	文献閲覧
④	9/6(水)	資料調査	国立国会図書館関西館	1	文献閲覧
⑤	10/25(水)	資料調査	国立国会図書館関西館	1	文献閲覧
⑥	11/25(日)	現地調査	兵庫県立考古博物館	2	関連行事調査見学
⑦	11/29(水)	資料調査	国立国会図書館関西館	1	文献閲覧

（※）このほか12/12（水）午後、近世播磨のたたら製鉄から近代製鉄の転換のあり方、近代製鉄所の所在地環境などを探るため、新日鐵住金広畑製鉄所の「熟延精製」現場等の見学調査をおこなった（当館から7名、各班の研究員有志8名、合わせて15名が参加した）。

## 「ひょうご歴史研究室」設置要綱

### (設 置)

第1条 兵庫県内の地域の歴史の調査・研究を通じ、県民の郷土の歴史に関する理解をさらに深め、教育、学術及び「ふるさと意識」に根ざしたひょうごの文化の継承・発展に資するため「ひょうご歴史研究室」(以下「研究室」という。)を置く。

### (場 所)

第2条 研究室の設置場所は兵庫県立歴史博物館内とする。

### (所掌事務)

第3条 研究室は次に掲げる兵庫県の歴史研究に関する業務を行う。

- (1)兵庫県内の歴史に関する調査・研究に関すること。
- (2)調査・研究成果の普及に関すること。
- (3)調査・研究成果の活用に関すること。
- (4)その他兵庫県の歴史研究に関すること。

### (組 織)

第4条 兵庫県立歴史博物館長の下に研究室の室長、副室長及びその他所要の職員を置く。

- 2 室長は兵庫県立歴史博物館長を、副室長は兵庫県立歴史博物館の次長をもって充てる。

### (庶 務)

第5条 研究室の運営に係る庶務は兵庫県立歴史博物館において処理する。

### (補 則)

第6条 この要綱に定めるもののほか、研究室の運営に関して必要な事項は別に定める。

### 附 則

この要綱は、平成27年4月1日から施行する。

# 平成30年度 ひょうご歴史研究室構成メンバー一覧

## 【ひょうご歴史研究室コア会議メンバー】

室長	藪田 貫	兵庫県立歴史博物館 館長
副室長	豊田 幸雄	兵庫県立歴史博物館 次長
参与	中元 孝迪	播磨学研究所所長、兵庫県立大学特任教授
研究コーディネーター	坂江 渉	兵庫県立歴史博物館 ひょうご歴史研究室
歴史研究推進員	大村 拓生	兵庫県立歴史博物館 ひょうご歴史研究室
△ 研究員	堀田 浩之	兵庫県立歴史博物館 館長補佐
研究員	藤田 淳	兵庫県立考古博物館 主任調査専門員兼学芸課長
客員研究員	小林 基伸	大手前大学総合文化学部長(史学研究所所員)
共同研究員	大谷 輝彦	姫路市教育委員会文化財課 課長補佐
共同研究員	村上 泰樹	兵庫県まちづくり技術センター 主任技術専門員
県教委事務局	山下 史朗	兵庫県教育委員会事務局文化財課 課長
☆ 県教委事務局	中村 弘	兵庫県教育委員会事務局文化財課 主幹

## 【『播磨国風土記』研究班】

◎ 研究コーディネーター	坂江 渉	再掲
研究員	神戸 佳文	兵庫県立歴史博物館 社会教育推進専門員
客員研究員	古市 晃	神戸大学大学院人文学研究科 准教授
客員研究員	高橋 明裕	立命館大学文学部 非常勤講師
客員研究員	垣内 章	播磨学研究所 研究員
共同研究員	大平 茂	前三木市立金物資料館館長
共同研究員	大谷 輝彦	再掲
県教委事務局	中村 弘	再掲

## 【赤松氏と山城研究班】

◎ 客員研究員	小林 基伸	再掲
研究員	堀田 浩之	再掲
研究員	山上 雅弘	兵庫県立考古博物館学芸課担当課長補佐
客員研究員	田村 正孝	大手前大学史学研究所 研究員
☆ 共同研究員	中井 淳史	兵庫県立大学地域資源マネジメント研究科 教授
共同研究員	藤木 透	佐用町教育委員会教育課企画総務室 副室長
共同研究員	大谷 輝彦	再掲
共同研究員	島田 拓	上郡町教育委員会教育総務課総務・文化財係 学芸員
歴史研究推進員	大村 拓生	再掲
県教委事務局	永 恵 裕和	兵庫県教育委員会事務局文化財課 技術職員

## 【たたら製鉄研究班】

◎ 共同研究員	村上 泰樹	再掲
☆ 研究員	吉原 大志	兵庫県立歴史博物館技術職員(学芸員)
△ 研究員	藤田 淳	再掲
客員研究員	大槻 守	香寺町史研究室主宰
☆ 客員研究員	岩城 卓二	京都大学人文科学研究所 教授
共同研究員	伏谷 聡	兵庫県企画県民部管理局文書課文書管理班 非常勤嘱託
共同研究員	田路 正幸	宍粟市教育委員会教育部 次長
共同研究員	笠井 今日子	西宮市立郷土資料館 学芸員
共同研究員	土佐 雅彦	兵庫県立篠山東雲高等学校 教諭
県教委事務局	小川 弦太	兵庫県教育委員会事務局文化財課 主査

☆ 県政推進事務員 長澤 喜史 兵庫県立歴史博物館 ひょうご歴史研究室  
 ◎各研究班リーダー、☆平成30年度新規、△移動

## 執筆者紹介

- ・ 藪田 貫 (やぶた・ゆたか)  
ひょうご歴史研究室長
- ・ 古市 晃 (ふるいち・あきら)  
ひょうご歴史研究室客員研究員
- ・ 中村 弘 (なかむら・ひろし)  
兵庫県教育委員会事務局文化財課主幹
- ・ 島田 拓 (しまだ・ひろし)  
ひょうご歴史研究室共同研究員
- ・ 大村 拓生 (おおむら・たくお)  
ひょうご歴史研究室歴史研究推進員
- ・ 土佐 雅彦 (とさ・まさひこ)  
ひょうご歴史研究室共同研究員
- ・ 竹内 通弘 (たけうち・みちひろ)  
洲本市長
- ・ 藤木 透 (ふじき・とおる)  
ひょうご歴史研究室共同研究員
- ・ 藤田 淳 (ふじた・きよし)  
ひょうご歴史研究室研究員
- ・ 垣内 章 (かきうち・あきら)  
ひょうご歴史研究室客員研究員

## 編集後記

平成二十七年(二〇一五)四月に開設されたひょうご歴史研究室の事業も、今年度で四年目になりました。

本紀要も昨年度までは、『播磨国風土記』研究班・赤松氏と山城研究班・たたら製鉄研究班それぞれが主体となった特集号を組んできましたが、本号では各班の連携を意識しながら、全ての班からの研究成果を掲載しています。

また「歴史遺産活用」では、『播磨国風土記』研究班がすすめている淡路古代史研究との関わりで、竹内通弘洲本市長から原稿をお寄せいただくとともに、研究室メンバーが職務として従事している活動についても紹介しています。

来年度も当初の研究テーマを継続しながら、より幅を広げて県下の歴史研究の発展につとめたいと考えています。関係者の皆様のより一層のご支援を、心よりお願いする次第です。

(大村拓生)

## ひょうご歴史研究室紀要 第四号

平成三十一年(二〇一九)三月二十二日発行

編集・発行 兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室

(編集担当・坂江渉、大村拓生、長澤喜史)

〒六七〇〇〇〇二 兵庫県姫路市本町六八番地

電話 〇七九―二八八―九〇一一

HP <http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekiken/>

印刷 合名会社 柳生印刷所

〒六七―一五六一 兵庫県揖保郡太子町鶴五六八

電話 〇七九―二七六―〇〇四八